

第34回例会報告

— 基調講演 —

経営者の生き様

～なぜWell-beingが必要か 試練と苦悩と逆境～

第34回例会では、第一部の基調講演として、株式会社ベアーズ取締役副社長の高橋ゆき氏に『経営者の生き様～なぜWell-beingが必要か』をテーマにお話しいただきました。

講演内容

ベアーズは、日本において暮らしの新しいインフラ「家事代行サービス産業」を作ろうと、25年前に夫婦で創業した会社です。

私は、写真家の父と起業家の母の間に誕生しました。両親と一緒に会社を経営していたのですが、私が26歳の時に倒産、共倒れし、1日500円の貧乏生活になり苦境に立たされました。私は知り合いに拾われて香港で働くことになり、そこで出会ったのがフィリピン人メイドのスーザンでした。

私より5歳年上のスーザンは、既に男の子のママでした。スーザンは大学卒業後、国内の大手企業から内定も出ていましたが、香港にメイドとして出稼ぎに来ていました。その方が収入が3倍も多いからです。「自分も母親の出稼ぎのおかげで大学に行けた、私は子供や夫との人生の夢を叶えるために今ここにいる」と言い、そして「私に仕事を与えてくれることは、私に幸せを積み重ねてくれるのと一緒なんですよ」と言ったのです。「人の家庭の笑顔やそのための仕事が自分の人生の幸せ」というスーザンの言葉に、私はゾクゾクしました。私は、スーザンのような人が日本にも担い手側として増えたら、もっと日本に優しい風が吹くんじゃないかと確信したのです。

日本に帰国後、夫に「お前ブスになったな」と言われました。異国の地で初出産と育児、フルタイムの仕事に追われても笑顔だったのに、日本に帰ってきたら笑顔が消えた、そういう意味でした。私は「スーザンがいないから」と答えました。その時にふいに夫が「産業を作ろうか」と言ったのです。これが25年前のベアーズ誕生の瞬間です。



私たちはスーザンとの原体験を元に、日本の「子育て」と「働く」を明るく楽しく幸せにしたい、また担い手のモチベーションも職業地位

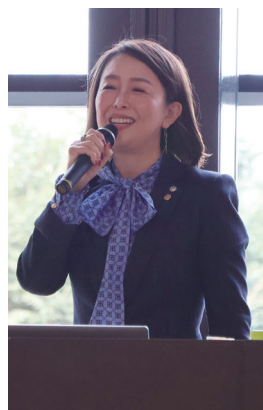
も上げて、情熱と誇りを持って働いてもらいたいと、家事代行サービスを始めました。自分たちだけでは産業は作れない、暮らしのWell-beingを推進するためには、半生をかけて社会の風ごと作る! とここまで来ました。2023年の岸田政権の骨太方針の中には「家事支援サービスの利用推進」という言葉が入りました。25年前の夢が実現しつつあります。

Well-beingとは、常に「良い状態」を指すわけではなく、あらゆる自分のコンディションと向き合って自分を知っている状態だと思っています。私は、「人との出会い・愛・感謝など、自分が一番実感できる幸せを見つけていきましょう」といつも言っています。

幸せを感じる暮らしと企業を増やしていくことが私たちの務めです。そして、社員の幸せは必ず企業の力になります。社員のWell-beingが高いと、創造性が300%、営業成績が37%、生産性が21%アップすると言われています。他方で、Well-beingが低いと、退職・事故・欠勤・燃え尽き症候群が増え、離職率が35%アップするというエビデンスが出ています。

経営者にとってもWell-beingは重要です。良好なコンディションで正しい選択・判断をするのが、上に立つ者の役目だと思います。また、社員のWell-beingの状態を見極めたマネジメントが必要になってきます。1人1人Well-beingのあり方は違うので、従業員ごとのWell-beingについての面談が必要です。

先日内閣府から発表された行政改革推進会議の文書にも「Well-being」という言葉が取り上げられました。これからWell-beingの風が日本国内に吹き上げていきます。今年の世界幸福度ランキングで日本は47位。皆さんと共に「この国の暮らしをもっと良くするんだ」という思いで、愛をもって進んでいきたいと思っています。



講師
プロフィール
Lecturer Profile

高橋 ゆき 氏 [株式会社ベアーズ 取締役副社長]

IT企業の営業、出版社マーケティング部門勤務の後、香港の現地商社に入社。帰国後、夫で社長の高橋健志氏と共にベアーズを起業、家事代行サービス業界のリーディングカンパニーに育てる。家事研究家として、TBSドラマ「逃げるは恥だが役に立つ」をはじめ、数々のドラマ・映画の家事監修を行っている。全国家事代行サービス協会会長、日本ウェルビーイング推進協議会理事、日本フェムテック協会理事なども務める。

第34回例会報告

就業体験プログラム実施報告

多摩地区にある19の私立大学、多摩地区大学就職研究会の協力により実施された就業体験プログラム。8月中旬～9月中旬の1カ月間、9つの企業において44名の学生が就業体験を実施しました。例会では、2社の企業と1名の学生に、それぞれの立場から実施後の報告をしていただきました。

株式会社タカキ 総務企画部長 片山利明 氏 総務企画部主任 左舘由美子 氏

私どもは、役員・社員合わせて124名、東大和市に本社を構える会社です。「地域に暮らす人の住まい作りのお手伝い」を企業理念に、住宅資材の販売等を行なっています。

今回参加した就業体験プログラムは、3日間の構成にしました。1日目は会社説明と若手社員との座談会、2日目に外回りの営業体験、3日目に内勤の営業サポート業務体験という内容です。大学1年生1名、大学3年生2名の計3名の学生が参加してくれました。期間中は、朝礼から終業まで、当社の社員と変わらないスケジュールで体験してもらいました。

1年の学生は、将来的に飲食店経営にも興味があると聞き、経理業務の体験プログラムを用意しました。3年生の2名は、これからの本格的な就職活動に備えてこのプログラムを活用したいとの希望でしたので、若手社員との座談会の時間を長く設定し、就職活動での悩みなどを相談できる場を設けました。気楽に話しやすい、面倒見の良い社員に対応させました。与えられた内容だけで

なく、イベント等で使うチケットのデザインを自らで考える業務もしてもらいました。

就業体験プログラムを実施してみて、社内が大変明るくなり活気づいた

のが大きな効果でした。また、学生がどのような考えで就職活動に取り組んでいるのか知ることができたのも収穫でした。当社の若手社員からは「担当業務を学生に教えることで自分自身の成長につながった」という声も聞かれました。

来年以降も多くの学生に当社の就業体験をしてもらい、自身の就職活動に役立てていただき、またその中で当社も学び、成長につなげていきたいと考えています。今後も地域の大学との密接なお付き合いをお願いしたいと思います。



エム・ケー株式会社 専務取締役 小林久恵 氏 社長室 浅川智子 氏

当社は、日野市に本社を構え、「ともにまちづくりを」をスローガンに掲げる総合不動産デベロッパーです。社員は48名、この11月に創業35周年を迎えます。

今年8月に実施した就業体験プログラムには、多摩大学、明星大学、法政大学、東京経済大学、武蔵野大学より計11名の学生が参加、当社にとっては過去最大の受け入れ数でした。

初日は座学から始まり、「大規模開発事業」をテーマに現地視察を行いました。実際のプロジェクト担当者が講師となり、現地でレクチャーを行いました。2日目は「土地の有効活用」をテーマに、物件の視察ツアーや座学を行いました。最後に2日間の学習成果をまとめて、学生に社内発表を行ってもらいました。発表会は全社員で聞きました。若手や人事部だけに任せるのではなく全社で取り組む姿勢が大事だと、インターンシップを実施する度に感じています。

今年弊社に入った4名の新入社員のうち、2名は体験参加者です。このような実績も出ておりますので、メンバー企業様にもお役立ていただければと参考までにご報告します。



《参加学生の声》多摩大学 経営情報学部2年 浅沼宏樹さん

エム・ケーが手がける社会貢献について発表することで、事業内容を深く理解できた2日間でした。自分の地元である多摩地域の良い企業を知るきっかけになりました。インターンシップに参加したことで、就職活動に対する姿勢が前向きになりました。「入社がゴールではない」と気づかされ、自分が目指す将来について考え直す良い機会にもなりました。

総括 多摩地区大学就職研究会 代表幹事

昨年に引き続き、多摩地域の優良企業の就職体験プログラムを実施し、今年は倍の40名を超える学生を受け入れていただきました。昨今は短期間のインターンシップが大半の中、学生の学びや気づきにつながるような中身の濃いプログラムをご用意いただきました。

武蔵野大学キャリアセンター支援課長 渡邊敏生 氏

企業の皆様が、地域貢献や発展という視点でこの会に集まり、未来を担う学生に対しても熱い思いでご支援いただき、感謝申し上げます。企業と大学、多摩地区一丸となって連携し、来年度以降もこのような取り組みを続けていければと考えています。